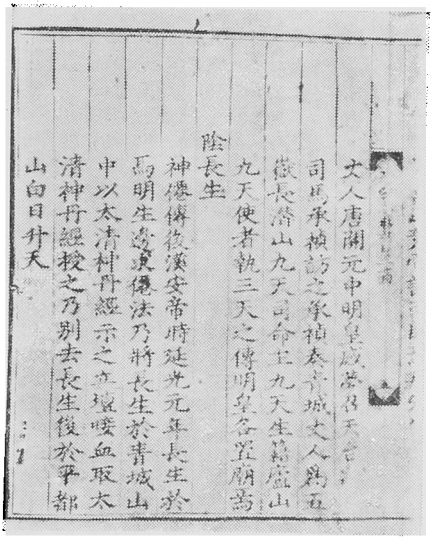
大元一統志の零葉に就いて

日比野丈夫

最近内藤乾吉氏から大元一統志の零葉の寫眞を一枚頂戴した。之は昨春、氏が北京の傅沅叔(增湘)氏の宅で宋元本の零葉を數多綴つた者の中から發見して橋川時雄氏に撮影を依頼されたものとの事である。此處に掲げる寫眞が卽ちそれである。

元の一統志が早くから散佚して、最早や今日では極く一部分の鈔本と數葉の刊本とに依つて僅かに其の面影を窺ひ知るに過ぎない狀態である事は改めていふまでもない。昨年金毓黻氏は此等の材料に據つて殘本、輯本を作り考證、附錄を附して遼海叢書第十集に收めた。之に就いては已に本誌の第二卷第四號に愛宕松男氏の甚だ詳細な批評がある。

今紹介しようとするのは寫眞に見られる樣に、前半葉を缺いてゐるが、版心は殘つてゐるので卷六百三十四の第五葉である事がわかる。每半葉十行、行二十字。卷六百三十四といへば金氏の殘本卷八の成都府路灌州の條に當る。さうして此の卷にはたゞ我が杉村勇造氏の藏する第七葉と大連圖書館所藏の第八葉とが收められてゐるのみである。とすると此の零葉は金氏も知らなかつたもので、未だ紹介された事がなかつたのであらう。恐らく此等の三葉は元來完全であつた一卷が何時の間にか散亂し


丈人唐開元中明皇成道召天師
司馬承禎訪之承禎奏言城丈人為五
嶽長濟山九天司命上九天生籍盛山
九天使者執三天之傳明皇各置廟焉
陰長生
神僊傳後漢安帝時延光元年長生於
瑪明生受道僊法乃將長生於青城山
中以太清神丹經示之立壇嘗血取太
清神丹經授之乃別去長生後於平都
山白日升天

て一葉一葉所を異にして好事家の手に渡つたのではないかと思はれる。

元來、元の一統志に大小二種の刊本が存する事は周知の事實であるが、兩者共に大德重修本であり、行款亦相同じくたゞ版の大小の差に過ぎないといふ事も殆ど疑がない。東方學報東京第五冊續編に大連圖書館の零葉を始めて紹介した青山定男氏は版心にある數字の相違から、之が北平圖書館所藏の大小二種の刊本の何れとも異る第三種の刊本であると斷定したが、金氏之を難じてそれが杉村氏所藏の一葉と共に北平の大本に當る事を述べてゐる。傅氏所藏のものは半葉框廓、縱二五・五糎、横一九・四糎。大連圖書館のものは殆んど之に等しい。さうして青山氏が北平圖書館所藏の小本と相補ふものと認められた宋元書影所載の零葉の寸法は此の二者に一致する。それでは金氏の考へは思ひ違ひであらうか。遺憾乍ら、目下北京では圖書館は、治安維持會の手で嚴重に保管されてゐるといふ事であるし、猫の手も欲しいといふ彼の地で態々本の寸法を計つて貰へる樣な閑人も當分は得られさうにない。兎も角以上の點からすれば、此等の卷六百三十四に屬する三葉は北平圖書館の小本と同種の者である事が想像され、現在の所大元一統志の刊本はやはり大小二種に限られる樣である。

記事の內容は全く輿地紀勝卷百五十一瀧州仙釋の條其の儘であつて、陰長生の前が最初の寧先生であるから、仙釋の部は此の第五葉の前半から始まると思はれ安期生、張天師、王仙柯を經て第七葉の呂洞賓に續くのである。他の部分に於ても元の一統志は南宋の舊疆域に關する限り殆んど輿地紀勝の燒き直しともいふべく、之に多少紹定以後の沿革の記事を加へたものにすぎぬ。而も紀勝が雙行であつた所を擴大して大字一行とし、徒らに卷帙の莊大をはかつたものゝ樣である。然し北方金の舊領域に於ては元和郡縣志、太平寰宇記等の外に張洽の地理沿革表であるとか、方輿樞要とかいふ樣な總志を引き、或は隨所に大德中纂修せしめた各行省の圖冊の類を引用してゐるのも珍らしいが、特に葭州の條に金大定職方志及び金集禮地理志の名が見えるのは注目を惹く。此等は恐らく金史地理志の材料となつたものであらう。いづれ此の事に就いては別の機會を得て述べてみたい。